

初等音楽

音楽教育講座・田邊 隆

1. 授業の概要

この授業は、学校教育 2 回生後期の授業で、履修希望者に対して音楽科教員が均等の人数で担当している。全クラスの条件として、(1)規定の出席数、(2)半期での合格数は 7 曲以上、(3)試験として「伴奏 1 曲」「弾き歌い 1 曲」を課している。

本クラスでは、履修者の音楽歴に差があるため、個々の学生の実態に沿い、個別指導を主体として、ピアノ伴奏や弾き歌いを中心に指導した。演奏の振り返りについては、「YAMAHA : Piano Control unit PPC500R」の再現機能を活用して、自らの演奏に傾聴出来るように、履修者に対し適宜フィードバックを行った。特に読譜に慣れない履修者については、コードネームによる伴奏を説明し、その演習を勧めた。

2. 音楽歴・合格曲・授業外の学習時間

この授業は、受講前の音楽経験が達成度に色濃く影響する科目である。fig.1 は、半期間で合格した曲数を基にした一覧である。また fig.2 は、各調査項目間の相関係数を示したものである。ピアノ歴は無いが、その他の音楽経験が 7 年間ある履修者 E に

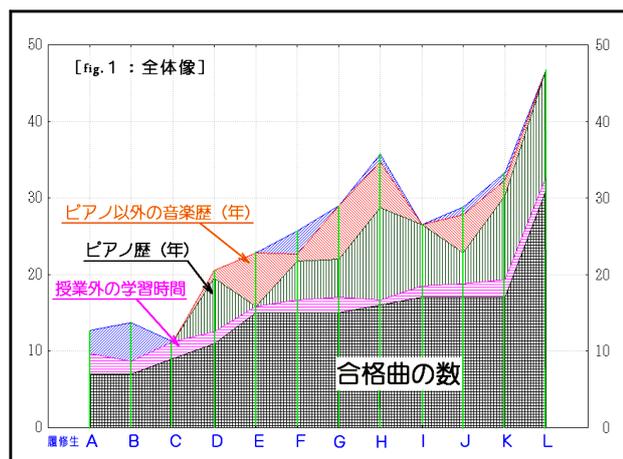


fig.2 相関 有意確率(強調表示) $p < .05000$ N=12

変数	ピアノ経験年	ピアノ外経験年	授業外学習時間	合格曲数	欠席
男・女	-0.55	0.10	0.06	0.55	-0.37
ピアノ経験年	1.00	0.01	-0.21	0.77	-0.39
ピアノ外経験年	0.01	1.00	-0.51	0.11	-0.34
授業外学習時間	-0.21	-0.51	1.00	-0.21	0.23
合格曲数	0.77	0.11	-0.21	1.00	-0.48
欠席	-0.39	-0.34	0.23	-0.48	1.00

代表されるように、ピアノ経験数によらず、成果を上げる事例も、希ではあるが毎年見られる。しかし、fig.2 で示すように、当然のことながらピアノ経験年数と合格数との相関が高い ($r=0.77$) など、経験上の認識を裏づけるだけの結果であった。

授業外の学習時間については、音楽経験が多いほど、授業外学習時間は少ない傾向 ($r=-0.51$) を示し、音楽歴の少ない履修者の中でも、将来、小学校教師志望学生の方が、中・高等学校教師志望者より、合格曲数が多い傾向にあった。小学校では、全科指導が前提という認識が、影響しているものと推測する。

3. 学習への支援

音楽経験が少ない履修者への学習支援は、本科目の課題の一つである。音楽は、入学時に試験内容として課されていない分野だけに、将来教職に就くことを想定し、授業内容・方法の検討が求められている。

今回は、全員のカルテを作成し、個々の進捗状況を紙面と音源の両方で記録し、質問や進捗状況の確認を増やすために、ティーチングアシスタントを活用した。その中で、希なケースではあるが、前述 E の事例の中に、改善のヒントはあると考えた。

E に対しては、ピアノに関する初心者として、ピアノの細かな奏法にこだわることなく、まず、本人自身の曲想確認、そして本人の曲想から鍵盤上へ意識を移行させることを配慮した。1 週間に 1 曲の合格数を目標としたが、目標を上回る (平均 1.25 曲/週) であった。後半は、次第に細かい表現方法について取り扱うように配慮した。

一方、経験が豊富な履修者に対しては、質と量の両者を目標とさせ、授業外学習時間の確保を促した。履修者 I・J・K の平均は (1.33 曲/週)、L は (2.58 曲/週) であるが、これ以上、授業内の対応は限界である。さらなる授業の効率化を考えるならば、事前録音の提出等があげられる。